

精神科研修プログラム

《A》 研修内容

1. 研修施設

主に当院神経科一般病棟、神経科外来。状況に応じて他科病棟、ICU 等。

2. 研修目標

- ・精神科診察法を身につける。
病歴聴取 面接技法の習得 精神症状の記載 診断方法 家族とのコミュニケーション
- ・特殊検査法を用いた判断解釈を学ぶ。
CT 脳波 SPECT 心理テスト 知能検査 神経内分泌検査
- ・精神科治療学の実際を把握する。
薬物療法 精神療法 無けいれん電撃療法等
- ・各種医療スタッフの連携を図る。
看護師、ソーシャルワーカー、薬剤部、検査室、心理療法士等との連携
地域医療との連携
作業所導入
- ・コンサルテーション・リエゾン・サービスを経験する。

* 経験したほうがよい疾患

うつ病(躁うつ病を含む)・統合失調症・痴呆症 を始めとして
不安障害・摂食障害・人格障害・身体疾患由来の精神障害(せん妄等)など

3. 実際の研修内容

外来 指導医の下で診断法、面接法を研修する。新患の病歴聴取を行う。
病棟 指導医の下で面接、治療を施行する。
手技 点滴、血ガス等の処置当番を行う。電撃療法等に携わる。

4. 週間スケジュール

	8:35~9:00	午前	午後	その他
月	朝カンファランス	病棟処置・外来診療	部長回診・病棟カンファランス・病棟診療等	夕方～医師カンファランス
火	朝カンファランス	病棟処置・外来診療	病棟診療等	
水	朝カンファランス	病棟処置・外来診療	病棟診療等	14:00～ 病棟レクリエーション療法
木	朝カンファランス	病棟処置・外来診療	病棟診療等	
金	朝カンファランス	病棟処置・外来診療	病棟診療等	勉強会等
土日祝日		(10:00～)病棟処置		

* 基本的に土日・祝日は当番制で病棟処置を行う。

* 適宜クルズス実施の予定。

《B》精神科研修についてのコメント

1)精神症状の捉え方の基本を身につける。

精神科臨床では身体症状と精神症状の両面を把握し、相互の連関を考えることが必要です。精神科だから精神症状だけ診ると思うのは先入見です。精神医学の観点から精神症状と身体症状の見方を研修することが重要です。

たとえば睡眠覚醒リズムの乱れや、原因不明の種々の自律神経失調症状などが、精神科でポイントとなる身体症状です。どれもいわゆるストレスや心身連関に関係する症状として重要です。

精神症状の診察については「関与しながら観察する」態度を研修してもらいます。原因を究明してゆくのではなく、「症状の連関」を「了解」しながら診断するプロセスが精神科診断学の大きな特徴です。そのため精神科では了解する力(共感や解釈の力)をどう育てるかが重要な課題になります。一般身体医学の研修に必須の基礎学(生理学や生化学、組織学等々)があるように、精神医学の基礎学があります。心理学や人間学などです。短い研修の間ですが一般の医療者にとって日頃疎遠なテーマ、人間の心や生涯、人格の成熟、人と人との関係、人間の歴史的社会的位置などについて、精神医学の基礎という観点から学ぶ機会をもちたいと考えています。

2)精神疾患に対する初期対応と治療の実際を学ぶ。

症状を把握するレベルから疾患の診断－治療のレベルへ進むために必要な、最低限の臨床精神医学体系と方法を修得する。一般の医学的診断学の手順は診察と検査所見から原因を推測します。すでに原因が解明されている疾患を扱うことが圧倒的に多いからです。それに対して精神科では原因の明らかな疾患はその一部に過ぎません。大部分は原因がなお不明です。脳という器官の複雑さのため未知なことが多く、さらに精神症状と脳機能の関係が非特異的であるため、簡単に原因結果を決定することができないのです。このような特殊事情のもとで、精神医学はなにを、どのように診断するのでしょうか。

精神科臨床診断法は原因解明による疾病学的診断学だけでは不十分です。疾病学的診断とならぶ類型学的診断や心理学的診断の役割と方法を知る必要があります。それは医学的診断学の全人的診断構造を理解するためにも重要な課題です。

3)デイケアなどの社会復帰や地域支援体制を理解する。

近代精神医学を特徴づけるポイントには、たとえば症状と経過の客観的記述にもとづいた体系化、薬物療法の進歩、無意識の心理学の成立など重要なものがいくつかあります。それらと並んで精神医療における社会復帰(リハビリテーション)もまた忘れてはならないポイントです。精神医療の現場の多様性と構造を理解し、相互の協力関係に加わることが要請されます。病院内におさまらない広い精神科医療の実際についての知識を身につけると共に、関連施設(精神病院等)での見学や実習の機会をもてるよう考えています。

以上のような研修を通して、医学全体の中で精神医学すなわち心の医療はどんな意味と役割をもっているのかを考えてもらいたいと思います。将来どんな診療科の医師になるにしても、病むことの苦しみは身体の苦痛だけでなく心の苦しみでもある、という単純な真理をわきまえた医師であるべきです。当科での研修が、そのためにいささかでも役立つように指導するつもりでいます。